

# 第14回広島大学ホームカミングデー企画 法科大学院講演会

「Global Ground Zero: Hiroshima, Transformation, and the Praxis of Peace」

Peter Chordas

(通訳 小泉 直子)

令和2年11月21日(土)に、第14回広島大学ホームカミングデー企画(法科大学院講演会)「Global Ground Zero: Hiroshima, Transformation, and the Praxis of Peace」として、東千田未来創生センターにおいて、広島市在住のフリーランス・ライター Peter Chordas 氏を講師に迎え、講演会を開催しました。

本稿は、当日のテープ録音をもとに、その概要を報告するものです。

## ★秋野成人氏(広島大学大学院人間社会科学研究所実務法学専攻長)

広島大学法科大学院の秋野と申します。

主催者を代表してご挨拶させていただきます。

本日は、秋晴れの中、広島大学ホームカミングデーに多数お集まりいただき、誠にありがとうございます。また、新型コロナウイルス感染対策へのご協力にも感謝申し上げます。

本日講師を務めていただきます Peter Chordas 氏には、ご多用中にもかかわらず、本日のご講演をご快諾いただきましたことに感謝申し上げます。また、逐次通訳をお引き受けいただいた小泉直子様にも御礼申し上げます。

ホームカミングデーの趣旨は二つございます。一つは広島大学を学びの場としてご縁のあった方々に年に一度キャンパスにお越しただいて、旧交を

温めていただくこと、もう一つは、地域の方々に、広島大学が今、どのような状況にあって、これからどういうことをしていこうとしているのかなど、大学の最新情報にふれていただくということです。

特に、私からは大学の最新情報をお話いたします。

まず、広島大学では、昨年から本年にかけて、文系・理系の大学院を、学問・研究の両分野で融合を図っていき、それによってイノベーションを起こし、人類に対する貢献をなす新たな研究を活性化していくことを目的として、再編しています。

文系の大学院は、人間社会科学研究科に統合され、法律学・政治学、経済学、経営学といった社会科学、文学、歴史学、心理学、教育学という人文科学という二つの大きな領域を融合させて、人を育てる学問・研究の機能強化と拠点化を図っております。

これからの学問を支える大学院生が、自己の研究領域にとどまらず、他の学問領域における知見や研究手法といったものを学んで、これを取り入れることを期待しています。さらに、すべての大学院生に、今一度ヒロシマの地で世界平和を考える機会を用意し、平和の実現を目指して欲しいと願っております。

私のおります法科大学院でも、未知の問題に対応できる、創造的な課題解決能力のある法曹、裁判官・検察官・弁護士を育てることを目的としております。同時に、ヒロシマの地で紛争解決を学び、法曹への途を歩むことの意味を、もう一度考えてもらうということも重視しております。

本日の Peter Chordas 氏のご講演も、この学問領域を超えた研究から世界平和を考えるという、広島大学の大学院再編の趣旨に照らして開催いたします。

本日のご講演が、皆様にとって、実り多きものとなりますことを祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

★進行 (東千田地区支援室長)

それでは、Peter Chordas 様について、ご紹介させていただきます。

Chordas 様はアメリカ・オレゴン州のポートランド州立大学で学ばれ、文学・芸術分野において学士号を取得されました。

現在は広島市内でフリーランスの記者、写真家、ウェブデザイナーとしてご活躍中で、ジャパントイムズ、せとうちDMOのインバウンドマーケティングサイト「SETOUCHI TRIP」、観光ガイドブック「るるぶ」の多言語版「OMOTENASHI Travel Guide」など、様々な媒体に寄稿されています。

また、HIP（平和のためのヒロシマ通訳者グループ）において、被爆者の証言を英訳する指導もされておられます。

本日の講演は英語で行われますが、通訳は小泉直子様にご担当いただきます。小泉様は過去にもChordas様の講演会で通訳を務められ、また、Chordas様とともに被爆者の方の手記を翻訳されています。小泉様、本日は、よろしくお願いいたします。

それでは、講演に入ります。

Chordas 様、よろしくお願いいたします。

## ★ Peter Chordas 氏

はじめに

皆様、こんにちは。今日は、ご参加いただき、ありがとうございます。

私の名前はピーター・コーダスです。ご紹介いただいたように、広島市に住んでいます。職業はライターと写真家です。このように美しく意味深い広島に暮らせることを光栄に思います。

広島について考えるとき、ほとんどの人は、まず原爆のことを思うでしょう。当然のことです。—平和記念資料館の中で数分でも過ごす機会があり、被爆者の証言を聞く機会に恵まれれば、「あの日」についてのイメージが深ま

り、核兵器や戦争についての理解が確固たるものになるでしょう。

しかし、原爆の歴史的な理解と、広島についての理解は別物です。前者は、ただ死と破壊について理解することですが、後者は、人類の深い可能性や、この世界を変えていける私たちの力について、教えてくれるからです。

今日、私は、過去、現在、未来について、お話ししたいと思います。つまり、1) 広島がいかに平和都市に変わったか、2) 広島のレガシーを継承することにより、私たちが戦争や正義や環境などの現代の問題に対して、いかに行動を起こせるか、3) そして広島の過去の教訓を学ぶことによって、いかに私たちが将来直面する変化に立ち向かう力を得られるか、についてお話ししたいと思います。

## 平和宣言

1945年8月6日8時15分、最初の原爆が広島上空で爆発したとき、その閃光は、この街を壊滅的に破壊し、何十万人もの人々の命を奪っただけでなく、人類の進歩が行きつく先を浮かびあがらせました。炎と苦悩の最後のあえぎは、ダンテでさえも予言するのに身震いしたでしょう。

絶滅のリハーサルのような、原爆直後の惨状においても、広島の人々は自分自身が生きようとしただけでなく、他の人々も生き残れるよう、努力するようになりました。市内で被爆した人々だけでなく、世界のだれも、核戦争の恐怖を決して経験してほしくないと願ったのです。

原爆投下から2年経ち、初の普通選挙で選出された浜井信三市長は、のちに平和公園となる場所に立って、広島からの最初の平和宣言を読み上げました。

「…これによって原子力をもって争う世界戦争は人類の破滅と文明の終末を意味するという真実を世界の人々に明白に認識せしめたからである。これこそ絶対平和の創造であり、新しい人生と世界の誕生を物語

るものでなくてはならない。われわれは、何か大事にあった場合、深い反省と熟慮を加えることによって、ここから新しい真理と道を発見し、新しい生活を営むことを知っている。しかりとすれば、今われわれが為すべきことは全身全霊をあげて平和への道を邁進し、もって新しい文明へのさきがけとなることでなければならない。」

(1947年8月6日 広島市長 浜井信三)

浜井市長がこう宣言したとき、原爆による傷跡が、物理的にも心理的にも、また社会的インフラの面においても、まだ生々しく残っていました。第1回「平和祭」において、浜井市長は集まった人々に向けて話しました。その多くは、太平洋戦争や、戦後の飢餓で友人や家族を亡くした人々でした。

日本人はみな、何とか戦争を生き残った人々たちだったのです。

## 戦争の定義

しかし重要なことは、戦後の広島の人々にとって、平和は遠い夢ではありませんでした。これが大切な点です。今の日本の状況とは異なり、1945年に生きていた日本人はすべて、平和な時代を知らずに子供時代を過ごしました。戦争と戦争の間に小休止はありましたが、帝国(日本)は、次々にアジアで戦争を続けていました。

1. 戊辰戦争(1868年)
2. 台湾侵略(台湾出兵)(1874年)
3. 西南戦争(1877年)
4. 日清戦争(1894年)
5. 第2回台湾侵略(割譲)(1895年)
6. 義和団事件(1899年)

7. 日露戦争 (1904 年)
8. 太魯閣戦争 (1914 年)
9. 第一次世界大戦 (1914 年)
10. シベリア出兵 (1918 年)
11. 満州侵略 (満州事変) (1931 年)
12. 日中戦争 (1937 年)
13. 仏印侵略 (仏印進駐) (1940 年)
14. 第二次世界大戦 (1941 年)

もちろん、帝国の国民は、「戦争」という言葉の本当の意味を十分には理解していませんでした。教育、メディア、ニュース報道などによる合法的なプロパガンダで、帝国は、国民に戦争の現実を見せないようにしていました。見なければ、考えることもありません。

日本人は、そういう意味では、今のアメリカ人と似ていました。アメリカ人はだれも、アメリカが戦争をしていなかった時代を知りません。海外で暴力が起きても、ヘッドラインになることはほとんどありません。普通のアメリカ人の戦争の知識は、映画やテレビやビデオゲームや、大企業が牛耳っているメディアが意図的に流している「ニュース」と称するものの断片から得たものなのです。

この原理が働いているのを知りたければ、アメリカの主な第二次世界大戦の映画や、大ヒットした AAA (トリプル A) のゲームのリストを見てください。そして、ヨーロッパを舞台とするものと太平洋を舞台とするものの数を比較してください。そうすれば、ナチスと戦う兵士の物語のほうが、多くの戦闘機が隊列を組んで、一般の市民が暮らす都市を焼夷弾で爆撃する物語よりも、はるかに英雄物語を語りやすいことがわかるでしょう。

ペンタゴン (国防総省) は、大ヒット映画やゲームに、意図的に毎年資金を提供しています。時には脚本を書くのも支援しているのです。また国防総

省もCIAも、大勢のフリーランスのジャーナリストを登録し、世界中の主な出版物に記事を書かせています。帝国時代の日本人と同じく、ほとんどのアメリカ人は、彼らが消費しているメディアに政府が影響力を行使していることを、全く知らないか、積極的に否定しています。

そして、今の日本のメディアも、同様のくびきにつながれて、操られていることは確かです。

## 木の銃弾

太平洋戦争が泥沼化するにつれて、帝国日本は、国民に戦争の現実と、それに伴う苦境を見せないようにすることが難しくなっていました。

男の家族が前線で戦死するようになりました。連合軍の潜水艦が日本軍の補給路を断ち、食料が不足しました。軍需用の金属も不足し、金属製の像や公共の場を装飾した金属が消えました。戦争の継続が困難になりつつある中、学徒が軍需工場や畑に動員され、連合軍の空襲が間近になると防火帯を作る目的で建物疎開にも動員されるようになり、子供たちの教育は滞りました。攻撃で死んでも、だれの死体かわかるように、人々は服に自分の名前を縫い付けました。

そしてすぐに空襲が身近に迫り、それについて人々が語るのを聞いたり感じたりするようになりました。このころになると、日本人はみな、B29のエンジン音を聞き分けられるようになり、最も近い防空壕はどこか、眼球が爆風の風圧で飛び出さないように抑えるやり方も、知るようになりました。広島原爆投下数週間前、子供たちや老人は、機関銃を持った兵士たちと戦うために、竹やり訓練を受けました。金属がないので、軍需工場はマホガニーで銃弾を作りました。

広島の人々がそのような状況にあったとき、1945年8月6日、世界初の核攻撃の炎が広島の人々を呑み込んだのです。

そして、それでもすべてが終わりになり、全世界が戦いをやめることがで

き、後に残された死体やがれきの荒野から新しく立ち上がることができたのだから、私たちにできないことはないのではないのでしょうか。「このような世界とは違う世界も可能」という古くからのスローガンがありますが、戦後の広島のがれきの中ほど、それが強く感じられたところはありませんでした。

## 夢見る人たち

戦後の広島市の行政が作った市民による広島市復興審議会が、そのよい例です。彼らは「夢見る人々」と呼ばれるようになりました。

彼らは、新しい広島の姿を描くように求められ、驚くべきアイデアを生み出しました。素晴らしいアイデア、ファンタスティックなアイデアが生まれました。実現可能なアイデアばかりではありませんでしたが、素晴らしいアイデアでした。

例えば、「広島のを川を運河で結んで、東洋のベニスを作ろう。」と提案した人もいます。また、「水上カジノを作るべき。広島にモンテカルロを作ろう。」と言った人もいれば、「ピカソに監修してもらって、町の中心に、芸術家のコミュニティを作ろう！」と言った人もいます。

すべてが実現可能ではありませんでしたが、これらのアイデアの多くが、今日の広島を作りました。

今日の広島を特徴づける、河岸緑地、公園、美術館、広い道路、平和学習プログラムなどは、このような情熱的な夢見る人々の提言から生まれてきたものです。彼らは、核戦争の灰燼から立ち上がり、世界を照らす希望の光となることを思い描いたのです。

新しい広島は平和都市にならねばならないというこの方針は、しっかりと根付き、広島の復興の努力を支えるバックボーンになりました。

## 平和都市

広島の復興を、年代を追ってみましょう。

## 1940年代

原爆後、約20年の間に、広島は現在私たちが知る平和都市として開花しました。1946年8月6日に、最初の臨時の平和復興祭が開催されました。その日の夕方、被爆者は、川に消えた人や劫火に焼かれた人の名前を書いた白い灯籠を元安川に流しました。この伝統は灯籠流しとして現在も行われています。

翌年、正式な第1回「平和祭」が開催されました。そして浜井市長が、広島から、歴史的な平和宣言を行いました。

1948年、長岡省吾は、自分で見つけた貴重な資料を、公民館の机や椅子に紙を敷いて展示しました。地質学者であった彼は、広島のがれきから原爆の資料を組織的に収集した最初の人で、この展示が平和資料館のもととなりました。

同年、原爆の最初の主な碑が建設されました。それは原爆によって動員先で亡くなった広島市立高等女学校の生徒たちの碑でした。しかし、これは厳密にいうと、慰霊の碑ではなく「平和の塔」として建立されたものです。なぜなら、当時はアメリカの占領下で「プレスコード」という検閲制度があり、それにかからないようにするためです。プレスコードは、日本人が戦争記念碑を建てたり、占領を批判したり、原爆についての詳細をメディアで語りたりすることを、幅広く禁止していました。その結果、広島市立高等女学校のモニュメントは、実際は原爆の悲劇を記憶するためにつくられたものですが、表向きは平和を象徴するデザインながら、その中に原爆の悲劇がコード化され、隠されたのです。

その間、浜井市長は被爆した広島の復興に特別な予算を出すよう国に求めて、東京で陳情しました。1949年、日本政府は占領軍のGHQ（連合軍総司令部）とともに、平和記念都市建設法を議会の全会一致で可決しました。この法律によって、平和プロジェクトの資金が提供され、軍用地が広島に譲渡

され、正式に「平和都市」広島が認められました。

この法律の第 1 条に、「恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴として、広島市を平和記念都市として建設する」とあります。

## 1950 年代初期

1950 年に、当時は弱小の広島カーブが創設されました。その夏、アメリカの占領軍は、新たに始まった朝鮮戦争に大量の動員が必要となることを予想し、8月6日の平和祭を中止しました。警察の取り締まりを受けた抗議者たちの中に、かの有名な峠三吉がいました。峠の『原爆詩集』は素晴らしい詩集で、1951年、アメリカの占領軍の検閲を逃れるために海外で発行されました。その中に、その日の出来事を痛烈に批判する詩が収められています。

鳩を放ち鐘を鳴らして  
市長が平和メッセージを風に流した平和祭は  
線香花火のように踏み消され  
講演会,  
音楽会,  
ユネスコ集会,  
すべての集りが禁止され  
武装と私服の警官に占領されたヒロシマ,

(峠三吉 「一九五〇年の八月六日」 『原爆詩集』 より抜粋)

1952年に日本の占領は終了し、8月6日の平和記念式典で、原爆孤児たちによって、最初の正式な原爆死没者のための慰霊碑が除幕されました。

翌年、遺族が本川の河岸に小さな石を置き、原爆で亡くなった広島第二中学校の生徒の共同墓地の印としました。これは、民間の団体が原爆の碑を建

立した最初の取り組みでした。原爆の悲劇を記憶し、その教訓をシェアする活動は、政府から国民へのトップダウンで生まれたものではなく、戦後の広島のあらゆる層に広く浸透した一つの主義となりました。

1954年、広島市は広島平和記念公園を正式に開園しました。また、アメリカがビキニ環礁でキャッスル・ブラボーというコードネームの核実験を実施し、日本の漁船、第五福竜丸が放射性降下物に被曝しました。

特にこのビキニ環礁での事件は、多くの被爆者に警鐘を鳴らしました。差別に直面し、ほとんどの被爆者はひっそりと暮らしており、被爆者であることを苦勞して隠そうとする人々も多くいました。しかし福竜丸がニュースになると、核兵器によって、彼らが目にした地獄が、いつかまた起きる可能性があるだけではなく、繰り返される核実験によって、すでに地獄が現実のものとなっていることがわかりました。日本人の乗組員が新たな被爆者となり、それを証明したのです。

## 1955年

そして1955年になりました。1945年にそれまでの広島が消し去られてから、1955年は新たな広島を作る重要な年となりました。

この年、原爆供養塔が除幕され、それまで10年間、行き場のなかった身元不明の7万人の遺骨が遺骨堂に納められました。また、平和記念資料館が開館し、第1回原水爆禁止世界大会が広島市で開催されました。12歳の被爆者、佐々木禎子さんが病床で折り鶴を折り、10年前に被爆した原爆による白血病で亡くなったのも、この年です。

私たちは今、この新たな広島が形成されていった過程を見ることができます。

原爆の遺産を継承する平和記念資料館で、いろいろな展示や遺品を見ることが出来るからです。人々は貴重な遺品を資料館に寄贈しています。自分の物語や原爆で亡くなった家族の物語を残し、語り継がれることを願うからで

す。このおかげで、人々は資料館に来て、何が起きたかを知り、その証拠を自分の目で見ることができます。

また、人々は原爆死没者の遺骨を収めた供養塔にお参りすることができます。平和公園には慰霊碑などの碑があり、訪れる人々は、戦争や戦争がもたらすものについて深く考えることができます。

殉教者となった佐々木禎子さん、そして折り鶴の象徴もあります。象徴は、運動やイデオロギーや共同行動を起こすとき、常に重要な役割を担います。運動の中で、私たちの最も深いメッセージを端的に伝えるのが象徴です。私たちが集結する旗印、私たちが前進する確固たる基盤となります。また殉教者も、すべてのイデオロギー運動にとって、常に重要です。

1955年当時、禎子さんだけでなく、広島ではすべてのがん病棟に、何十人もの子供たちが入院していました。この事実も広島を形作っていきました。

## つなぐ手

原水爆禁止世界大会において、もう一つの重要なできごとがありました。平和活動、反核活動に関わる人々が、初めて被爆者を招いて、証言を聞きました。

これがどれほど重要か、言葉に尽くせません。

一方、反戦・反核活動家は、彼らが廃絶を目指している兵器がもたらす実際の被害者の証言に支えられて、前進していきました。被爆証言は、これらの運動に力を与え、運動の正当性を裏付けました。コーネル・ウェスト博士は、「苦しむ人々の話を聞けることが、真実の条件である」と語っています。被爆者は、放射能の影響を受けた、この世の地獄の証言者として、反核運動にかかわる人々から、差別されるどころか尊敬されていることを知りました。

皆様ご存じのように、あと約2か月で核兵器が国際法のもとに違法となります。

被爆者の活動や証言がなければ、核戦争が起きてやっとならば、この恐ろしい兵

器の禁止に人々が真剣に取り組むようになったかもしれません。その時、人が生き残っていればの話ですが。

1955年の原水爆禁止世界大会で、参加者は『原爆を許すまじ』という美しい歌を合唱しました。その中に、広島赤十字病院を訪問した中国からの学生たちがいました。彼らは、そこでもこの歌を歌いました。この歌を聞いた禎子さんは、何度も繰り返して歌い、同じ病室の人たちも、この歌を覚えました。

### 相互に影響

このように、禎子さんは平和運動に影響を与えただけでなく、平和運動から影響を受けてもいます。世界大会に参加した被爆者もそうです。被爆者と活動家の相互に影響を与え合う関係は、正義を求める運動において、常に重要な役割を果たします。

被爆者のアイデンティティや核廃絶運動の、この数十年にわたる移り変わりを見ると、このことがよくわかります。被爆者のサーロー節子さんは、核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)の最も重要な人物の一人です。ICANは、核兵器禁止条約の立役者です。

歴史のロードマップは、一方通行として語られることが、多すぎます。一人の重要な人物が行動を起こし、他の人々が一方的にその影響を受ける、という図式です。実際は、このようなことはありません。世界はそうに動きません。このような変化は、決して突然起きません。変化をもたらし、影響を与え、変化に応える人々は、決して何もない真空中の中で行動しません。「突然」起きると思われる地震も、何千年もの地殻変動の圧力を受けて初めて起きるのです。そして、圧力を与えるプレートの一つ一つが、それに対する反作用として、また圧力を受けるのです。

私たちの最も大切な権利や社会的な達成は、心の広い支配者から自由に流れ出たものではなく、大衆運動によって支配者の手からもぎ取ったものです。しかし、このような分析は、特に国定の歴史教科書の単純化された記述には

見られません。違うでしょうか。

## 運動が生まれる

禎子さんが亡くなった後、彼女の親しい友達が、自主的に集まり、「六年竹組『団結の会』」を作って、禎子さんをしのび、碑を建立するための募金を始めました。学校の生徒からのみ寄付を受けていた彼らの活動は、国際的な関心を集めるようになり、子供たちの全国的な平和運動を起こしました。1年で、彼らは現在の貨幣価値で50万ドルを集め、原爆の子の像を建立しました。この像は1958年5月5日のこどもの日に、除幕されました。

この運動は広島を超えて、大きな影響を与えました。実際、原爆ドームが保存されたのも、子どもたちの平和運動によるものです。禎子や彼女の友人の会の延長線上といえます。

原爆直後、ドームを保存するか解体するかについて、議論が巻き起こりました。しかしこの議論の核心は、広島原爆を私たちがどのように記憶するかということです。「あの日」の苦しい記憶を思い出させるドームを取り壊したい、という人々もいました。同じ理由で、ドームの保存を訴える人々もいました。彼らは「あの日」の苦しい記憶を思い出させるものが、未来の世代にとって必要だ。」と主張しました。しかし、保存するにも解体するにも資金がありませんでした。それで、激しい議論が1960年代まで続きました。

しかし原爆の子の像が建立された翌年に、流れが大きく変わりました。被爆者の楢山ヒロ子さんは、1959年8月6日の日記に、こう書きました。「あの痛々しい産業奨励館だけが、いつまでも、恐るべき原爆を世に訴えてくれるだろうか。」それからまもなく、彼女は禎子さんと同じく白血病で亡くなりました。

## 苦しい記憶を思い出させるもの

ヒロ子さんのときには、すでに子供たちの力強い平和運動がありました。

彼らは原爆の子の像に集まり、ヒロ子さんの日記を読みました。翌月、子供たちはドームの保存を求めて募金活動を始めました。浜井信三市長をはじめ、自治体の関係者に手紙も書きました。

驚くことに、浜井市長はドームの保存に最初は反対でした。市長は政治家として、どれだけ費用がかかるかを知っていたからです。市にはそのようなお金がありませんでした。また、市長も被爆者で、壊れた原爆ドームを見ると自分の苦しい記憶がよみがえることも理由の一つでした。しかし、情熱的で若い活動参加者の手紙を読み、市長は考えを変えました。彼は広島の市長でしたが、東京に行き、自ら公園に立って、原爆ドームを保存するための募金を呼びかけました。

1966年、このような活動が実って、広島市議会は全会一致で原爆ドームの保存を採択しました。今、あの「苦しい記憶を呼び起こすもの」だったドームは、核兵器廃絶と恒久平和を求めるシンボルとして、ユネスコの世界遺産となりました。

私は、ドームの保存が決定された瞬間に、広島がどのような街になるかが決まったと思います。それまでは、広島がどうあるべきか、様々な面で漠然としていました。「平和都市」といっても、いろいろな意味があります。しかし、崩れかかった原爆の遺跡を、広島市の主要な特徴として保存すると正式に決めたことで、被爆者の遺品を保存・継承し、世界中の人々が見られるように展示するという誓いも立てられたのです。

その決定的な瞬間に、広島は真の意味で変わりました。

## 分析, 比較, 訂正

では、これは今の私たちにとって、つまり現代の広島にとって、どのような意味があるのでしょうか。

二つ答えがあると思います。一つは、広島のこれまでの運動と、日本の内外における現在の運動の共通点を分析する必要があるということです。もう

一つは、広島とそのメッセージが意義を持ち続けるために、そして広く伝わっていくために、私たちは広島の平和の使命を、幅広く横断的に国際的な社会政治運動と結び付けなければなりません。例えば、人種問題、環境問題、労働者の権利、女性の権利、同性愛者の権利、先住民の権利などです。

皆様の多くにとって、これらの問題は広島とは無関係で、平和運動とはまったく別物だと思われるかもしれません。また、広島の前爆の継承をほかの問題と結びつけることは、私たちの運動に力を与えることにはならず、かえって力を削ぐことになると思われるかもしれません。

少しお時間をいただき、そうではないことを証明させてください。

### 正義を求める運動

まず、共通点について考えてみましょう。たとえば禎子さんです。

禎子さんの物語は、普通、かなり限定的な物語として語られます。つまり、被爆して10年後に若い少女が亡くなった。死の床で千羽鶴を折った。他の子どもたちが禎子さんのために記念碑を建てた、という物語です。

しかし、同じことを、より広い視点でとらえると、どうなるでしょうか。

禎子の物語は、罪もない少女が、無意味で組織的な暴力によって亡くなり、他の若者たちが力を合わせて行動を起こした物語でもあるのです。私たちは普通、禎子さんの後で起きた活動を平和運動と考えますが、平和運動の核心は、正義を求める運動ではないでしょうか。これらの子供たちは、過ちを正すのでなければ、なぜ禎子さんの活動をしたのでしょうか。何らかの償いを求めるためでしょうか。ほかのだれも同じ運命で苦しむことがないように、不公正を明らかにするためではないでしょうか？

このように考えると、禎子さんだけでなく、たとえば名前は変わっても、(警官に殺された)トレイボン・マーティンやジョージ・フロイドにも通じる同じ物語だということがわかります。

もちろん、正義を求めるあらゆる運動の先頭に立つのは、常に若い人々で

す。なぜなら、若者、特に子供たちは、不正義によって得るものが何もなく、失うものが多いからです。

戦争のただ中にいる子供たちは、「巻き添え被害」という言葉で、あっさり片付けられてしまいます。子どもたちは、いかなる国家暴力からも、自分たちを守るすべがありません。戦争になれば、若い人々は、自分が負傷するか、戦死するか、孤児になることしか想像できないでしょう。警察による暴力もそうです。自分に対するものでも、親に対するものでも、警察の暴力は戦争の暴力と同じです。

私は佐々木禎子さんの親友だった被爆者の川野登美子さんの話をお聞きしたことがあります。「原爆の子の像は、世界の子供たちから世界の大人へ、正義なき戦争をやめるよう、直接訴えている」と川野さんはおっしゃいました。

ブラック・ライブズ・マター (BLM) の抗議行動に参加した人の話も、慰霊碑の階段でお聞きしました。広島を破壊した暴力と、何も武器を持たない黒人のアメリカ人を殺した暴力は、同じだと彼は断言しました。

年齢や出身背景に関係なく労働者は、自国であれ外国であれ、国家暴力から得るものは何もありません。

## 環境運動

また、(グレタ・トゥーンベリの)「未来のための金曜日」にも共通点がみられます。「未来のための金曜日」は、現代の子供たちが、人類の存続に対する脅威である気候変動に取り組む運動です。

これも、若者が、迫りくる絶滅、不正義、組織的な破壊に対して行動を起こすという点で、共通の物語です。

皆さんは、「未来のための金曜日」には、一見、ブラック・ライブズ・マターや広島で目にする殉教者がいないと思われるかもしれませんが。しかし気候変動の問題は、殉教者がいないことではなく、多すぎることです。毎年、火災や超大型台風によって何千人も犠牲になり、汚染によって何百万人も亡く

なっています。そして、いくつもの種が絶滅しています。

核戦争による環境のメルトダウンでは、私たち全員が殉教者になります。

軍備のために資源が暴力的に乱用され、有毒物質が戦場や実験場を汚染し、アメリカが化石燃料を世界一消費していることを考えると、戦争と環境問題が切り離せないことは明らかです。

人々の戦争をストップするだけでなく、環境に対する戦争も、私たちはストップしなければなりません。

同時に、プリンストン大学の研究者たちは、2050年までに、気温上昇によって戦争が56%増加すると予測しています。アメリカの軍部でさえ、気候変動によって紛争が増大すると正式に表明しています。

つまり、グローバルな温暖化は、グローバルな戦争に直結しているのです。

2019年、8千万人の人々が戦争避難民になりました。ちなみに第二次世界大戦では6千万人でした。経済平和研究所の最近の報告書は、気候変動によって、2050年までに12億人が避難民になる可能性があるかと警告しています。利益追求のグローバル経済制度と、意図的に作り出される欠乏により、そのように大量の避難民が出れば、戦争は避けられません。

ちなみに現在の問題についていえば、私たちはみな、恐ろしいウイルスが増えているのを目にしています。ふつうは人間が接することのない生物種の生息地が失われています。これらの種は時々、今の新型コロナウイルスのような、ひどい病気をもち、人間の文明の周辺に出現します。実際、環境学者たちは、何年も前から世界の各国政府に、現在起きているようなパンデミックを警告していました。しかし、多くは安くすむ「1オンスの予防」の重要性を見過ごし、「1ポンドの治療費」を選んだのです。なぜなら資本主義では、高い治療を売るほうが儲かるからです。

## 「平和」の意味

数十年前に広島市が原爆ドームの保存問題に直面したときのように、今、

広島は再び岐路に立っていると思います。これは、現在広島に存在している三つの平和に見られます。

「広島ブランド」として、商店の入り口や、地元の産物に掲げられる、ありふれた意味での「平和」です。そのような「平和」は、本当の意味を奪われています。「平和ベーカリー」や「平和靴磨き」と言う店名を、広島の人たちがつけることが悪いと言っているわけではありません。「戦争ベーカリー」よりいいです。しかし、平和と名付けることによって、平和に対する私たちのかわりを消極的ではあっても少しは強化することにつながる、とおっしゃる方もおられるかもしれませんが、それは結局、ただ手をこまねいていることと、ほとんど変わらないと思います。

また広島でよく使われる「平和推進」という言葉があります。これは、平和は戦争のない状態であり、教育や啓発に焦点を合わせた活動という前提に立った言葉であり、社会政治的な分析には至っていないと思います。このパラダイムでは、戦争の原因は常にイデオロギーによるものとされ、物質的な原因は考慮されません。つまり「人々の意見が対立するために戦争が起こる」と私たちは教えられます。私たちが多様性を尊重するようになれば、それで世界の流血沙汰はなくなる、というのです。特に政府はこの意味の平和を好みます。なぜなら、それによって平和の責任、ひいては戦争の責任は個人の責任であるとし、政府は責任回避できるからです。しかし戦争によって利益を得るのは統治者や政府であり、戦争を布告するのも統治者や政府です。

そして三つめの平和があります。それは、平和とは私たちが作るものではなく、公正、平等、正義の自然の結果という考え方です。このような平和の概念に立つと、戦争をなくすためには、戦争につながる物質的な条件を排除しなければならないことがわかります。

## 戦争は大きなビジネス

では、「物質的条件」とは何でしょうか。

まず、利益です。

戦争は、イデオロギー上の対立で引き起こされるのではなく、支配階級の物質的関心によって引き起こされます。アメリカとロシアが何千もの核兵器を保有し、現在も新たに核兵器を作っているのは、保有する核兵器がまだ不十分だと心配するからではなく、核兵器を製造している企業が、自分たちの利益が不十分だと思うからです。

アメリカが世界で最大の武器輸出国であるのと同時に、世界で最大の戦争プロモーターであるのは、このためです。2015年に世界の上位100の軍需企業が売り上げた3,080億ドルの56%がアメリカ企業に入りました。軍需企業の経営トップたちは、毎年何百万ドルも、ロビイストや政治献金に使っています。これは、企業が兵器を供給し続けられるように、アメリカ政府が兵器の需要を継続的に生み出すよう確保するためのものです。

アメリカの人道支援パッケージに、多くの軍事援助が含まれているのは、このためです。それによって、さらに多くの公的資金が、民間の軍需企業の手に入ります。

アメリカだけではありません。戦争は必ず利益と帝国のために戦われています。宗教や、自由・民主主義というたいそうな名分などは、戦争で利益を得ている者たちが、自分たちのでたらめを私たちが呑み込みやすくするための体裁です。

1918年、アメリカのユージン・デブスは、戦争反対を訴える演説を行い、逮捕されました。彼はその演説の中で、「どの国のどの時代の、いかなる戦争も、国民によって布告されたものはない。」と言いました。

### つながりをつくる

それが本当なら、戦争や武器製造に関する決定や、社会の中で戦争のためになされるあらゆる生産の決定は、いわゆる「指導者」の手にあるべきではなく、国民の手にあるべきです。ボトムアップのガバナンスです。

しかし、一人では、そのような社会的政治的な変革はできません。

私たちは他の運動と連携して、彼らの戦いを支援するとともに、私たちの運動に仲間を呼ぶことができます。古くからのことわざにあるように、「連帯は力」です。

実際、私たちが戦争、不正、核拡散、環境破壊の全体的な根源を理解すれば、私たちは結局、同じもののために戦っていることがわかります。正義がなければ、健全な環境がなければ、公正や平等がなければ、平和はありえないということに、皆さん、賭けてもいいです。

皆さんの中で、自分を活動家と考える方がどれほどおられるかわかりませんが、今、世界で起きている、戦争、気候変動、人種差別、性差別、同性愛差別、社会の階層化、そして少数の支配階級がこれらすべての事象から不当に利益を得ていることを見れば、そして、このようなことが変わってほしいと願うならば、活動家にならずにいられません。傍観している時ではありません。

私は、皆さんがどのような活動をするべきか、道筋を示すことはできませんが、すでに多くの活動や運動があります。ブラック・ライブズ・マター、未来のための金曜日、エクステンクション・レバリオン（絶滅への反抗）、数十もの反核・反戦運動、社会主義団体、アナキスト団体、移民の人権擁護団体、女性の権利を訴える人々、ホームレスのシェルター、貧しい人々に食事を提供するスープ・キッチンなど、様々な運動があります。既存の団体に参加するか、自分自身の活動を立ち上げてください。

何でもいいですが、今すぐ行動してください。私たちには勝ちとらねばならない世界があるのです。

## 広島：グローバル・グランド・ゼロ

もし皆さんが、今すぐ行動する必要性を感じていなければ、未来をちょっと垣間見るだけで、考えは変わるでしょう。

私たち人類は、どこへ向かっているのでしょうか。

21世紀の中頃までに、世界中で、嵐はより強くなり、火災がより頻発し、穀物が育たず、きれいな水がより得にくくなります。

そして全体を大きく変えていかなければ、戦争が激増します。

そして少数者や貧しい人々は、特に厳しい状況に置かれます。いつの時代もそうですけれど。

核兵器禁止条約が1月に発効します。これによって私たちは、人類生存にとって最も恐ろしい脅威の一つをなくすように核保有国に迫ることができます。これは同時に、他の運動と協力して私たちの世界を変えていく、よい機会となります。

平和の実践は、平和そのものを創出することにあるのではなく、平和が繁栄する物質的な条件を創出することにあります。

他のどの場所よりも広島は、世界中の、真実を求める人々、正義を求める人々、地球を守る人々、反戦運動家たちの架け橋となる力があるのではないかと思います。核兵器や戦争に対する反対運動と、正義や環境を守る戦いとを結ぶことができる場なのです。

広島の精神は、意識的な変革の精神、そして忍耐力だと信じます。浜井市長が75年前に雄弁に語ったこの精神は、現在の広島にも生きています。

浜井市長が語ったように、私たちは、新たな文明の先駆者にならねばなりません。

自然災害や紛争に苦しむこの世界で、どうすれば復興できるか、どう忍耐するか、答えを求めて、人々はあらゆる国から広島を訪れます。

今後起こる大惨事を世界に警告し、よりよい道を照らす責任が、私たちにはあります。それは犠牲となった先人たちへの義務であり、今私たちが作り出しているものを受け継いでいく将来の世代に対する義務です。

人々は、よりよい世界を作れると信じて、広島を復興し、人類への警鐘として原爆ドームを保存しました。

彼らが始めた活動を、私たちは継承しなければなりません。

## 広島精神

このような状況のもと、これまで以上に世界は広島を必要としていることがわかります。世界は、広島での平和のメッセージを必要としています。広島での過去の教訓、生き残った人々の経験、広島再生の推進力となった、世界を変えたいという情熱を必要としています。

広島は世界で最初の原爆による攻撃のグラウンド・ゼロであるだけでなく、世界平和のグラウンド・ゼロでもあります。それを忘れてはなりません。もし私たちが模範を示して先頭に立てば、広島は、世界の変革のグラウンド・ゼロになれます。

それはどのようなことでしょうか。

例えば、使い捨てのプラスチックをやめ、ローカルなグリーン・エネルギーのプロジェクトを開発し、日本で最初のカーボン・ニュートラルな都市になることもできます。無料の保育所や、働く家族のための市民農園を作ることができます。貧困をなくすために、累進課税とともに、普遍的にベーシック・インカムを実施することもできます。

あるいは、核兵器が人類史上最悪のものの一つであると考えた人々を組織して、東京まで行進し、ICANがその成立に重要な役割を果たした核兵器禁止条約に調印するよう、菅首相に要求することもできます。

日本が条約に調印した最初の国でなかっただけでも、たいへん残念なことです。日本は条約に調印する最後の国になりたいのでしょうか。

このようなことが一つでもクレージーだと思われたら、かつての広島を思い起こしてください。すべてが灰になり、がれきと化し、死体の山があった町で、広島で美しい河岸緑地を人々が散歩するようになることを思い描いた人々は、クレージーだったのでしょうか。

私たちは、次なるドリーマー（夢見る人々）にならなければなりません。

明日まで何もしないで、歴史を作ることはできません。

もしあなたが、がれきの町に生き残った被爆者だったら、何を作りますか。  
どのような世界を作りますか。

私たちは力を合わせて、どのような世界を作っていきますか。

広島精神は、皆さんがこれらに答えることを求めています。